



緑爽会報 NO. 108

12年 5月30日

発行

公益社団法人

日本山岳会 緑爽会

☎ 03-3261-4433

事務局 松本恒廣

夏原寿一 近藤雅幸

近藤 緑 川口章子

横山 隆 渡部温子

緑爽会総会及び講演、無事に終わる

新緑鮮やかな五月一日(木)、午後一時から JAC 会議室で緑爽会の総会が開かれました。冒頭、司会の松本代表から宮下啓三会員の訃報が伝えられると、つい三ヶ月前に講演してくださったことを思い、一同、哀惜の悲しみにかかられました。

昨年度事業報告、決算報告、本年度事業計画案、予算案と無事に終了。続いて富澤克禮会員による映像とお話「バイカル湖の旅」に移り、豊富な写真で、自然豊かな旅を共有することができました。終了後、有志は残って、当日差し入れのお菓子と前回飲み残しの酒類でしばらくの間談話しました。(関連写真3頁)

◆欠席者からのひとこと 一順不同
関塚貞卓 あいにく当日は都合がつかずまかせん。宮下啓三さんが亡くなられ残念です。講演会には体調悪く欠席しましたので、四月下旬にお見舞いありがとうございました。お会いできなかったのです。病厚きお身体で、天井を見ながら書いたというお葉書をいただき、「まだまだ大丈夫だろう」



仙元山にて 撮影 横山 隆

後列左から梅本・中澤・鈴木・川口・中尾・渡部 前列、梨羽・島田の皆さん

と書いていたのですが、残念です。講演が「山岳」に掲載されるのを願っています。図書紹介にセガテンリー二が載るのが遺稿となりました。

佐藤淳志 会報「緑爽会」が届くのが楽しみです。鳥海山、月山、朝日で実施されている森林管理署の「希少野生動物種保護管理事業」にお手伝いしながら、山三昧です。東北の山にも是非おいでください。

高辻謙輔 五月は新潟、福島に在住の同級生が裏磐梯に集まって、原発事故の緊急避難以来、

いまだに家へ帰れない同級生の激励会をやります。

梅本知榮子 たいへん残念ですが、当日は仕事にできていまして出席できません。写真を主にポツポツマイペースで山歩きを続けています。堀井昌子 高校の「かつての女子学生の会」と重なってしまいました。折角入会させていた

吉田理一 雪国も遅い春が訪れ、マンサク、カタクリ、ユブシ、イワウチワ等の花が一斉に咲き、大忙しの季節となりました。自然保護全国集会「尾瀬」でお会いできるのを楽しみにしています。

「四月山行」

奥武蔵 仙元山と和紙の里ハイキング

セツゲキヤマ

鈴木 快信

四月二五日(日) 東武東上線小川町駅九時三〇分、九人全員集合。前日の冷雨も上り、暖かく爽やかなハイキング日和となる。自己紹介の後、駅前正面の道の芭蕉の句と花の絵の立札のある歩道を南へ市街地を抜け、八高線踏切を渡ると登山口の天満宮へは駅から二〇分着く。しばらく階段が続くがミズナラなどのあるよく整備されたなだらかな心地よい山道を、四〇分で仙元山山頂(二九八・九三)に着く。山頂は高木のため展望はない。

集合写真の後、新緑と紅紫のツツジ、満開の山桜の白色、爛漫の間をぬって北へ下り、二〇分で見晴らしの丘公園に着く。爽やかな風と桜吹雪の中で、市街地を眺めながら軽く腹こしらえの後、一一時三〇分下山。二〇分で八官神社前を通り、田んぼ道の先に天台宗の古刹大聖寺の麓に着く。ツツジに囲まれた境内では、春季例大祭とあって老若男女で賑わっていた。我々も山上の本殿まで登り、参拝の後、小川沿いの

平野紀子 一八日より第一回山小屋サミット・夏山相談所のため上京しますが、残念ながら欠席いたします。いつも会報をありがとうございます。

山口節子 いつもご連絡ありがとうございます。トシ相応に、元気にしております。中澤喜久郎 通院、介護のため欠席させていただきます。

尾野益大 四月二九日に第一回四国支部総会を開くことができました。そこで来春「小島鳥水祭」を開くことが決まりました。忙しいです。今後とも指導お願い致します。

小道を通り、埼玉伝統工芸館へ入る。多くの人で混雑のため、うどんで会食し、小川和紙など伝統工芸品等の常設展示見学はパスして駅へ向う。

横山リーダから品評会で金賞受賞の酒蔵の話があり、八人が酒蔵見学を希望して「酒蔵晴雲」へ。三〇分かけて工場見学、酒粕等買って小川駅到着。東武電車池袋行急行に全員乗車、一六時池袋にて解散した。

当会の幹事の山行計画は、年齢相応で無理のない楽しいコースを計画されているので、今日一日、春を満喫し、充実した楽しいハイキングであったことを感謝しつつ、もっと多く参加されることを嬉しく思った。

「参加者」 梨羽時春・渡部温子・鈴木快信・中澤喜久郎・島田稔・川口章子・中尾千予光

L 横山隆 S L 梅本知榮子 計九名

◆緑爽会今後の予定

自然保護全国集会支援事業「被災地支援の旅」

六月二九日〜七月一日 宮城福島から尾瀬へ

係 川口章子 ☎047-463-8721

暑気払い

七月一九日(木) 一三時〜 JAC 会議室

要申し込 松本恒廣 ☎03-3326-2892

宮下啓三君を悼む

松本 恒廣

宮下啓三君のご長男穂高さんから、「昨日、父はなくなりました」との電話を受けたのは五月七日の朝であった。予期していたことはいえショックだった。

緑爽会としてはいつの間にか二月には彼に講演を依頼することが多かった。「来年も頼むよ」と電話したのは昨年の一二月であったが、その直後、改めて手紙を貰い、そこには五月中旬、肝臓の裏側の器官にガンが見つかり慶大病院に入退院を繰り返していたこと、何とか年を越せそうなので今回の話を引き受ける取り敢えず草稿を送るから見ておいてくれとのことであった。

病状を知って愕然としたが、中止にすべきか、ここまで熱心に取り組んでくれているのに今更ここで、と逡巡しているうちに二月を迎えてしまった。今回は、私のアルプス談義の最終章として「増えた山の名 消えた山の名」(1991.6)と題して話をしてくれた。立っているのは疲れるだろうから座れといつて

もきかなかった。座ったままで講演や講義をするのは僕の信条に反すると言うのだ。

彼が最初に当会での話を引き受けてくれたのは〇四年二月であった。以後、彼の出版は二月になってしまった。「何故か、緑爽やかでない冬に私の出版がつかられる」と皮肉られたが、常にユーモアとウィットに富んだ語り口は聞く者をひきつけた。「アルプスについての冬の夜話」に始まり、緑爽会に入会してこれ(06.9.16)「大島亮吉と深田久弥の残した大きな功績と小さな罪」(08.2.28)「冬のアルプス物語」(10.9.18)「フスキンについて」(11.2.29)などであった。

彼は比較的早くJACに入会した。一九六九(昭和三八)年、紹介者は折井健一、鈴木郭之の両氏。会員番号は5546。この話になると思い出すのは一人置いて5548番が羽田栄治さんで、また一人おいて5550番が前会長の宮下秀樹さん。そしてよくこう言うのだった。「彼がホンモノの宮下で私はニセの宮下だ」と。

八一年頃からは海外連絡、図書、書評等の委員会活動に積極的に関わり、なかでも得意の語学力を活かして内外の山岳文献の書評を数多くこなし、九九年から四年間は大塚会長の下で図書担当理事を務めた。

彼は一九三六年東京に生まれ、六五年慶大文学部大学院博士課程を修了。母校文学部教授を経て名誉教授、文学博士。元体育会山岳部長、三田文学会理事、日本独文学会、日本演劇学会会員。専攻はドイツ文学・演劇、スイス文化史。『中立を守る』スイスの栄光と苦



藤沢教会礼拝堂で花に囲まれた遺影 撮影 小泉義彦



宮下さんが描いた山岳会の先輩たち 左から木暮理太郎・横有恒・松方三郎・別宮貞俊・日高信六郎・三田幸夫 (『山』1976年3月号所収 その時点で物故者には召天マークが…)

いているのをよく見かけた。新宿や地元藤沢のデパートのギャラリーでの個展は、常に盛況であった。生来のものか、どこで絵筆を習得したのか知らないが、彼の人物デッサンの作品には、遠藤周作、江藤淳、米倉斉加年やドイツのコール前首相、ヒラリー・卿等が登場する。また絵画のほかには、「ゲートの詩」だけの朗読を競うコンテストの審査員長を三〇年近く努めてきた。

彼は学生時代は山岳部やワングル部には属さず、気のあった学友達と奥秩父や白馬、南ア白峰三山や空木岳、南八ツ等を歩いていたようだ。何度か「何処か軽い山歩きでもしなにか」と誘ったこともあったが、遂に実現しなかったのが心残りである。

思い返せば今を去ること六〇余年前、昭和一年四月、彼とは慶応義塾幼稚舎(付属小学校)で同じクラスだった。しかし当時の彼を思いだそうとすると、むしろ隣りの組の担任だった父上、児童文学者としても著名な宮下正美先生の常に柔和なお姿を思い浮べてしまふのだ。

その後、彼とは大学は同じでも学部が異なることもあり、顔を合わせることもなく、再び出会ったのはJACのルームであった。彼が緑爽会に入会してからは、以前にも増して接する機会が多くなっていったのに、彼を失った痛手は当分癒されそうもない。今はただご冥福を祈るのみである。

なお、『山岳』第百年(二〇〇五年)に「山とスポーツーラスキンとアルピニズム、そして現代の登山の位相」と題する論文が掲載されている。この機会にぜひ再読して頂きたいと思う。

(緑爽会代表)

宮下啓三さんを偲ぶ

早川瑠璃子

緑爽会総会当日、偶然松本さんと同じ電車に乗り合わせた。松本さんの第一声「それにしても早すぎるヨ」とつぶやかれた。宮下さんのことである。私も「同感です」と申し上げた。

想い返すと海外委員会でご一緒に仕事をさせて頂いたことがある。その折、委員長の佐藤テルさんは、宮下さんを敬愛され、大変なお気に入りだった。また、今井喜美子さんが長年主宰された飲み会「喜の会」の常連のお一人でもあった。佐藤さんも、今井さんも明治生まれの日本女流登山家の草わけの方たちであった。



「早すぎるわ」と今井喜美子さん

「喜の会」では、宮下さんは、遅れがちで、長身のお体をこごめながら席に着かれた。酒席では笑顔をやされない喜美子さんのお顔が、一時さらに輝く。

お二人のお付き合いの始まりは、若き日の宮下青年が穂高に単独で登り、穂高小屋での今井雄二・喜美夫妻との出会いからだ。直接宮下さんから伺った。「喜の会」がおひらきになると、連れだつて二次会に行かれた。何故か私にもお声がかかる。まだ主人が現役で帰りが遅かった時代だった。毎回ではないが時々お伴したことがあつ



あくまで信条を買った最後の講演

た。

宮下さんは、本当にお酒がお好きだった。駅近くの小さな飲み屋さんでも、何時も折り目正しく静かな飲み方だった。しかし集まった人たちと楽しく話をされる。その内、なぜか宮下さんのまわりだけが、高級バーで飲んでいような雰囲気をも出し出してくるのだ。不思議な方だった。

二月一六日は、宮下さんの話を聞くため少し早目に会議室に入った。向って左側の真ん中辺のテーブルに、もう宮下さんは座っておられた。ご挨拶しに行くと、「早川さん手伝わて」とおっしゃって、皆さまにお配りする資料の仕分けを頼まれた。

講師の席は、正面黒板の前と決まっていたのに、定刻が来ると、その場で話を始められたのである。それも直立姿勢をくずさず、よく透る大きなお声であった。あとで松本さんから、あの席の方が皆さんに、よく声が届くからと言われたと伺った。

それから二時間近く一回も座らずであった。この夜の宮下さんは、まさしく慶応大学教授であった。資料すべてに、マジックで色分けがしてあった。声も出ないほどの感動を覚えたら。素晴らしいご講義だった。

興奮の醒めない内にと、宮下さんに感謝の



緑爽会総会 撮影 小泉義彦

がんばれ、JAC

がんばろう、緑爽会

日本山岳会はいま、活性化をめざして新しい歩みを始めています。全国の支部活動を充実させることで組織の強化を図ったり、衰退した大学山岳部にかかわって青年層に登山技術を指導したりして、その成果は少しずつ上がってきています。会員の高齢化が進む中での本部の真剣な模索が続く一方で、委員会・同好会もその存在意義を考えないわけにはいきません。先輩から新人まで広い会員層をもつ緑爽会は、これからも山岳会らしいクラブライフを継承していきたいと思えます。会員の皆さんは、知人にJAC入会を勧め、緑爽会に誘ってください。緑爽会は新人を温かく迎えます。(事務局広報)

薬書を差し上げた。ほどなくして、想ってもみなかった宮下さんのお薬書を頂いたのである。私にとっては絶筆の薬書である。ご披露させて頂くことにした。

日本山岳会をこよなく愛された宮下さん。わけでも緑爽会こそが、宮下さん最晩年の憩いの場であったのではないだろうか。

合掌

さつそうのお薬書、何よりの疲れ除去薬として効果大のお言葉、ありがとうございます。今朝と坐ったままが講演や講義をこなすのは、老いのほかに、そんな横着者の話を聞いて聞けない、という、ほんの信条が、さつそうの早川さんが、緑爽会での話を終られたのは、本当に早川さんが、心を支えになつてくれた、さつそうの早川さんが、急な身体の不調で、抜けたような状態です。寝るをきりというわけが、近所への散歩は、ノロノロ気味ではあつても、支障を感ぜません。たぶん、大病病院の担当医は、一月の診察日に、二月十六日に講演の予定と、信条を下さり、その診察日に、二月十六日の診察で、どういふ判断を下すのか、即時拘留(入院)と、言われたのか、どういふ判断を下すのか、六月執行の山岳会のための図書紹介文は、すでに編集委員にわたりました。

二〇一二年、二月、二四 草香

セピア色の写真

宮澤美渚子

主人が静かに逝った。

残暑の陽射し目眩む日の午後、私を待たずに主人は搬送先の病院で目を閉じた。

無念の極まり、私を手を当てた額は既に冷たかった。晩年主人とはほとんど会話がなく、互いに老を重ねるなか突然の死別というはかなきこと身に染みた。

遺影の彼は、何とも言えぬ笑みで見つめている。今更ながら聞いておけばよかった、ということが多々ある。

主人の若いころの古びたアルバムは山行写真で埋められている。改めて見直した中に茶褐色に変色した2L版がある。松濤明・内野常次郎さん・有元克己さんの写真で、この写真は見覚えがある。しかし誰が何時撮ったものか分からない。裏に何か書いてあるかと思いいアルバムから写真をはがそうとしたが、べったり貼りついていて破れそうで、そのまま写真屋に持ち込みコピーした。

この写真は朋文堂から出た『風雪のビバーク』に載っているものと同じで、二見書房のものには顔の部分だけになっている。色あせた写真の背景は前穂か？西穂か？

主人、宮澤憲は一九四八年七月松濤と北岳中央稜バットレスを末端から完登し、その内容は松濤により当時徒歩溪流会から報告書が出ている。

主人は当時農大山岳部新人、松濤は農大出身だけれど、徒歩溪で活躍、母校の部室を訪れ、使えそうな部員を同行アシスタントにしていた。

北岳中央稜バットレス初登の報告書にトップはM、と記載されている。またその年の秋に松濤は主人を使い、穂高に入っている。

なお、その一二月松濤は一人で冬山の荷揚げをして、一旦帰京、暮れに有元さんと二人で計画通り北鎌から槍を目指した。

明けて一九四九年一月、取りついた北鎌の途中で風雪に耐え得ず遺書を残し千丈沢に滑落して生涯を終えた。

北岳バットレスを果たしたのはこの遭難の六カ月前の登攀で、相棒のMという人物が誰なのか、知られぬまま打ち過ぎた。

二〇〇六年山岳会発行の百年史に、松濤と主人のバットレス初登攀が載った。記録として山岳史上に名を残すことが出来て、私は嬉しく誇らしく思った。

これより先、宮澤憲本人が詳細をしたため『ヒマラヤ一つの峰の物語』の中に書いている。この著は東京新聞出版局から上梓し、織内名誉会員が序文を書いて下さっているが、売れるものではなく、自分のために書いたようなものと思っている。

主人は北岳のほか松濤と二人で同じ年の十月にも穂高に入っている。この下山時に松濤のカメラで主人が三人を撮ったのではないかと、憶測した。しかし背景の山稜は、新雪ではない、残雪のようだ、という元会長斎藤先生のご指摘で、尤もなことと理解した。

最近になって『上高地の常さん』を読んで新たな事実を知ることになった。

松濤は一九四八年北岳登攀の前月六月一日に有元さんと焼に登っている。焼岳のみの山行とは思えないので調べたところ、その足で穂高に入っている。焼岳散歩の後、上高地の常さんの小屋へ寄り、偶然写真家の菌部澄

さんに会い撮影されたもの、と『上高地の常さん』の著者牛丸工さんが記述している。そしてこの写真は、常さん没後常さんの弟さんが大町の山岳博物館に寄贈している。

「三人の写真は山博寄贈のものを見ただけで、同じものを持っている人がいるのは驚きです」という牛丸さんからの書簡をいただいた。確かに構図、配置などプロの方の撮影になるものと納得したものの、その後この写真の転載は撮影者不詳ということになっているという。何故だろう？ また主人のアルバムにあるものは誰からいただいたものだろうか？

私は患って四年、寛解に至ったものの老化と共に度々体調不調になり、京都の病院入院中のベッドでこれを書いてみた。

終戦直後、山行にカメラを持っていた人もまれで、ベタ焼き現像の時代、写真家が撮った2Lの写真は貴重だったと思う。

どなたかほかに、三人の写真をお持ちの方はいらつしやいませんか？ 主人は松濤明を慕ってはいなかったし、尊敬もしていなかった。多分、有元さんを偲んでいたと思うけれど、何故この写真を大事にしていたのか知りたいと思っている。

『風雪のビバーク』を裏から読む

―後記にかえて―

美渚子夫人の原稿に触発されて、宮澤憲『ヒマラヤ一つの峰の物語』を再読した。松濤明は北鎌尾根で遭難死した時の遺書が公開され、少し後に起きたナイロンザイル切断事件と共に、井上靖『氷壁』の中に使われている。おまけに松濤明の掃りを厳冬の上高地で待っていたという若い女性がいたということから悲恋物語としても話題を呼んで、松濤明は今も岳人の間で伝説の人だし、『風雪のビバーク』も読み継がれているらしい。

その伝説の松濤明と共に、北岳バットレス中央稜を初登攀したのが宮澤憲さんだった。しかも松濤が放棄しかけた難所を「やれるものならやってみろ」といわれてトップを交代、見事に乗りきって成功に導いたのに、報告書ではただ「同行者M」としか記録されていなかった。

当時は初登攀争いがしのぎを削っていた時代だった。松濤明は、農大出身でありながら大学山岳部とは関わらず、徒歩溪流会で先鋭的な登山を狙っていた。母校に来るときには、助っ人として役にたちそうな後輩を探してきたと言われている。もともと農家の子弟の多い学校である。戦後の食料難を考えると、米・味噌の調達にも都合がよかったのではなからうか。

若いときの人間は思慮に欠けるものである。松濤明が「M」としか記録しなかったことが、一人の山男の心を生涯傷つけるとは夢にも思わなかったのかもしれない。また、ノートに一言も記載がない女性を、恋人と言えののだろうか。考えてみると、『風雪のビバーク』にも、『氷壁』にも、陸に二人の山岳ジャーナリストの名が浮かぶ。安川茂雄・井上靖に材料を提供したことで知られる彼が、全ての仕掛け人だったのではないか。そんな気がしてならない。(近藤緑)



左から松濤明・内野常次郎・有元克己